

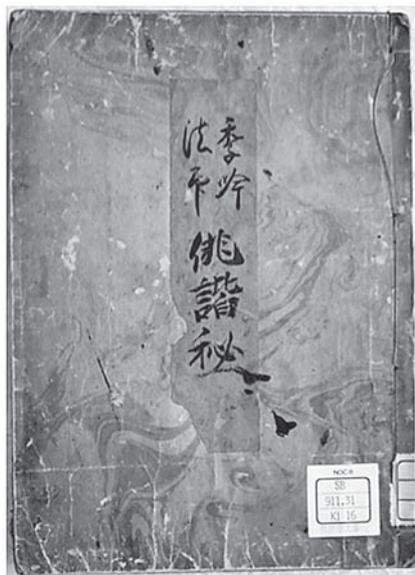
翻刻

立命館大学図書館西園寺文庫所蔵

『法印季吟俳諧秘』の紹介

立命館大学図書館西園寺文庫に標記の俳諧の伝書一冊（資料番号・2245）がある。書名から連想されるように、北村季吟が伝授をした秘伝書のひとつで、すでに広く知られている『俳諧埋木』や『俳諧進正集』に比べて、収録する本文量ははるかに多く、いわゆる広本『天水抄』の内容を含みもつなど、俳諧史のうえでも、きわめて重要な意味を有する伝書かと思われる。

（表紙）



書誌事項を記す。半紙本一冊、縦二三・四×横一六・八糎。表紙は白地に薄茶と黒の混合による墨流し模様。表紙中央に金砂子散らしの題簽を貼付し『法印季吟俳諧秘』と墨書する。本文は半丁を概ね十行から十一行で書写し、原

表紙、元糸で全五十八紙を袋綴に仕立てる。寛保元年七月下旬に成立した写本である。

本文を検するに、塗抹訂正後の加筆や朱筆による修訂が施される一方、和歌の引用では異同が多く、まま誤写が想定される。書写原本の誤りというよりも、むしろ書写者の誤認によるものが多いものと想像される。この点については、幸いにも同一内容の転写本が二本確認できる。ひとつは、江戸後期の写本とおぼしき大阪府立中之島図書館所蔵本（旧鹿田文庫本）の『法印季吟俳諧秘書』（内題）、もう一本が天保十二年の書写にかかる函館市中央図書館所蔵本の『法印季吟俳諧内秘集全』（外題）で、このたびの本文翻刻に際しては、本書（以下、西園寺本と表記する）に見られる誤写、不備をこの二本との校合によって示し、可能な限り書写原本に近い本文を想定するよう努めた。

書写者は、その奥書の署名から三河国西尾の俳人東文（伝未詳）であろうと考えられる。原本を所持する六々庵こと、太田巴静の元文四年の歳旦に名の現れる晩年の門人の一人であろう。その奥書には、

小林	孔	武田	悠希
高井	悠子	大坪	舞
二俣	希	岡橋	英子
中川	佳保	福田	宏美

此書者元祖貞徳^{ヨリ}貞室^ニ傳^フ貞室季吟^ニ傳^フ季吟^{ヨリ}濃之貞静軒^ニ傳授^ス其子六々庵^{ヨリ}愚受^レ之

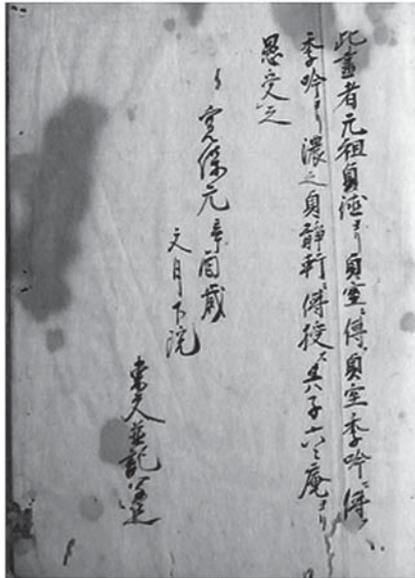
寛保元辛酉歲

文月下流

東文並記写之

とあり、西園寺本の来歴が明らかにされている。これによれば、原本は巴静の父、貞静軒可政が季吟より直接伝授をうけ、太田家に伝来した一書であつたらしい。東文はこの原本の書写を息子の巴静に許されたのである。「愚受^レ之」は同じ文中にある「傳^フ」・「傳授^ス」とは一線を画するもので、伝授をうけたと看做してはならない。あくまで拝借して書写をしたという程度にとどめおくべき措辞である。おそらくその太田家伝来の原本は、貞静軒可政がいくつかの季吟所持の伝書を書写し、これにもとづいて師の口伝が加えられる講義用の教科書に相当したのではなかつたか。ま

(書写者奥書)



ず、目次にしたがえば、三十一項目と追加一項目を加えた構成であるはずのところ、第八、第二十、第二十一の箇所は本文から欠落し、第二十二は存在するものの、第二十三以降は対応する条項の記述がない。書写者の東文もこれを不審に思ったの

か、第十九を記したのち、第二十二の前に「是マデハ第十九ノ口義ナリ。コ、ニ第廿二出ル。此間闕文歟。不知筆者云之」と記す。さらに第二十二以降は目次と乖離した内容となり、すでに原本の時点で書写に関する取捨が行われていた形跡が認められ、その性格の一端が垣間見られる。十八丁オモテまでが一書であつたと考えてよいであろう。

十八丁ウラには「或人説 連俳十三ヶ條」という文言より、一ツ書きが二条記されるが、以降は一ツ書きの体裁がとられず雑多な内容が記される。二十五丁ウラ一行目まで「此下白紙」という文言が散見されることから、やはり口伝による書き入れを前提としていた原本の姿を想像させる。このうち、二十三丁オモテ「志那弥三郎範重」から、二十三丁ウラ「良徳執す」までは『玉海集追加』（貞室編 寛文七年刊）の跋文にほぼ同文を見出すことができる。西園寺本はこれと校合したものである。本文と同筆の朱筆の書き入れが見られる。西園寺本で朱筆の書き入れがあるのはこの箇所のみであり、書写の様子が想起される点で興味深い。

二十五丁ウラから四十二丁ウラ一行目「相傳一大事秘切紙式拾五ヶ條ノ内七ヶ條」は、『天水抄』（いわゆる広本『天水抄』）「相傳一大事秘切令徳 在判」とある箇所は、『天水抄』においては欠落しており、代わりに連声の五音の記載がある。

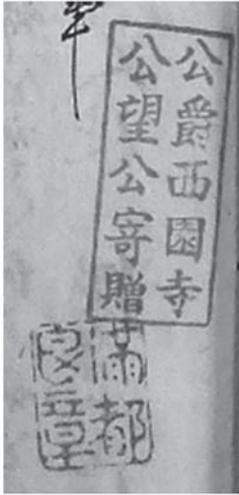
また、四十二丁ウラから五十七丁ウラの「切紙秘伝良葉抄」は『天水抄』「切紙秘傳良葉抄」にほぼ対応する。四十六丁ウラ「第四 風林之事」については「此儀は竹園抄にこまかくあり」とある箇所が、『天水抄』では省略されず、『竹園抄』と対応する十の次第が記される。跋文は、『俳諧天水抄』の跋文に類似するものの、本書の跋文がより詳細である。このように、『天水抄』とは近似する箇所についても、遡りうる原本はそれぞれ異なる祖本に求められるようであり、たとえば刊本『天水抄』

を直接参照し、記したという仮定は成り立たない。

ふたたび太田巴静について見れば、父の貞静軒可政は太田勘十郎との伝があり、美濃国竹ヶ鼻の庄屋であったという。元禄二年八月十九日に歿している。この年巴静は十二歳。その後しばらく兄の夕湖について学び、この道での交流を重ねたらしいが、その兄も元禄十五年七月四日にこの世を去っている。時に巴静二十五歳のことである。早くに父を亡くし、兄を若くして失った巴静が、父はもとより兄からも俳諧の相伝をうけたという事実は、おそらくなかったものと思われる。その巴静が父の秘伝書を背景に、やがて俳壇での地位を築いてゆくことになるが、今日伝存の『芭蕉家廿五箇条』をはじめとする巴静の伝書の種本が、ほかならぬ本書の原本であったことを申し述べる必要がある。ただし、この事実は、以下の【翻刻】によって確認いただけるものと思う。江湖諸賢の吟味を賜りたい。

なお、本書は西園寺公望の所蔵本であったが、旧蔵印の「満都良章」から判断して、それ以前の一時期、自ら芭蕉八世を名乗り、俳諧に関する墨蹟資料の蒐集家でもあった旧派の俳諧宗匠、松浦羽洲（文政九年〜大正三年十二月二十三日）が所持していたことを伝えている。

（旧蔵印）



【凡例】

- 一 立命館大学図書館西園寺文庫所蔵の『法語俳諧秘』を、改行、文字組等、原本の体裁をできうる限りとどめるよう翻刻した。
- 一 翻刻に際しては、読みの便を考えて、濁点、句読点を施した。本文中の見せ消ちは「々」の符号を用いて示したが、塗抹訂正痕のある場合は、その修正後の文字のみを翻刻した。
- 一 異体字、合字、片仮名も原本のとおりとし、誤字もそのまま翻刻し、後注に正しい表記を示した。なお、「ハ」の表記は「は」に統一したが、片仮名文、漢字片仮名交じり文では「ハ」のままとした。
- 一 通説に際し、原本で意味の通らない箇所、および重要な異同に関しては通し番号を付して後注に明示した。その際の校合本は以下のとおりである。

大阪府立中之島図書館所蔵『法語俳諧秘書』。(中)

函館市中央図書館所蔵『吟詠俳諧内秘集』。(函)

東京大学総合図書館竹冷文庫所蔵『天水抄遺稿俳諧』全（寛文十年）。

早稲田大学図書館伊地知鉄男文庫所蔵『天水抄』(寛文十一年)。

※どちらの天水抄も「天」を略称として用いた。

- 一 なお、注には参考となる出典を加えている。
- 一 明らかでない誤脱は、右の校合本を参照のうえ（ ）を用いて補った。
- 一 判読の困難な文字は、後注に影印を載せた。
- 一 一行書の和歌は文字を二字下げにし、二行書の場合は上の句を二字下げ、下の句を三字下げとした。付合もこれに準じた。
- 一 作者名の表記は、これを統一して文字を割り付けた箇所がある。
- 一 丁移りは「」で示し、各丁表裏の最終行末に丁数を加えて表記した。たとえば一丁表は「一オとした。

【翻刻】

寶泉山

- 第一 賦物之事
- 第三 発句本意
- 第五 歌制詞誹諧
- 第七 詞を残す発句
- 第九 をまはしの発句
- 第十一 はね字留発句
- 第十三 脇の句之事
- 第十五 四句目之事
- 第十七 面八句目九句目
- 第十九 呼出シ花引上花
- 第二十一 糸遊霞長閑の衷
- 第二十三 つゝ留りの衷
- 第二十五 てにをは之衷
- 第二十七 親句疎句之衷
- 第二十九 前句もたれ 前句をかる句
- 第三十一 六義之事
- 第二 発句本語本歌取用様
- 第四 無心所着之事
- 第六 聞発句并古語
- 第八 切字之事
- 第十 三段切発句之衷
- 第十二 大廻発句之事
- 第十四 第三之事
- 第十六 五句目之事
- 第十八 月華の句之衷
- 第二 句数之衷并去嫌
- 第二十二 春秋の両字添季を持句
- 第二十四 に留り并にて留り
- 第二十六 故事取用様
- 第二十八 篇序題曲流之事 并用付後付
- 第三十 灵形通体并四手付
- 第三十一 書物題号之衷

「見返

白雲山前寺

秋色 流水

第一 賦物之事

連歌、山船人木路五ヶといふ。其外、唐神垣嵐此衣^①など、千変万化の字小賦物と云也。委は賦物集とて、宗伊の定をかれ侍れば種々の子細有。傳授、第三までに通はぬ字を賦する也。追善の連歌、経文の連哥、夢想の連哥など書ことあり。されども、當流には賦物をとらず。たゞ俳諧之連哥と五文字にて、はし書する也。

「3才

第二 發句之事本歌本語取用様

發句仕立やう、様々の師傳、品々の工夫もある事、何れをさして、是ぞと云出んも風をつなぐ類な(る)^②べけれ共、本哥を取事、和歌連哥よりも有法なれば、いさゝか記し侍る。恋雜の哥をとりては四季の哥を讀、四季の哥を取ては、恋雜の哥を讀、常の習ひ也。月の哥を取て、月の哥をよみ、芒の哥を取て、花の哥を讀む。狼藉の至とぞ、古人掟也。俳諧にも此心なり。假令、契けんこゝろぞつらき七夕の年に一たびあふはあふかは、と有哥をとりて、

「1ウ

西

河

啼鳥者林北

落

落

「2才

「3ウ

契けん心ぞつらき餅つゝじ 則常

おもへども人めつゝ、みの高ければ川と見つゝ、もえこそわたらね、と云を取て、近代の哥に、

五月雨にふるの中道しりぬれば川と見つゝも猶渡りけり

是は、恋の哥をとりて、季の哥に讀なし、其心も新し。又、上の句に讀たる詞を腰へやり、下の句になし、又、下の句に有を上句に成てよむも不苦。又、其哥をあらはして取も一の法なり。

「4才

其哥を取とらずして取を、絹を盗て染て着たる心と、先達ふかくにくみ侍し。

本哥本語を用て心添有

女郎花たとへばあはの内侍かな 季吟

是は、かの蒸る粟のごとしといへるを、内侍と云そへたり。

月になけ同じくは今郭公

是は、月になけをなじ雲井のほとゝぎす、と云をとれ

り。同敷は今句の働也。月見れば千々に物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねど、といふ

をとりて、長明

「4ウ

詠むれば千々に物思ふ秋にまで我身ひとつの峯の松風

是は、かのみつねの我身の秋にはあらねど、といへるに

あたりて、その詠こし月に、また我身ひとつの

秋也、とこたへ侍る贈答の格なりとぞ。又、法橋兼載の句に、

まつ人に立枝や、すむ宿の梅

是は、我宿の梅の立枝や見へつらん思ひの外に君が来ませる、といふをとりて、待人のこぬは我宿

の梅の立えや其人のために霞みつらん、と人と

梅とを恨心を打かえして仕立給へり。此打かへ

していへるにて、心新しく成り侍る。かやうなるも

一の格也。又、声をかり、余の物に云たて、或は秀句をかぬるもあり。

「5才

治るや神祇靈地の四方の春

なむといつは味奇妙也菊の酒 元隣

此類も世間の格とおなじ。又、一字をたがへずして

用るも有。これも其所によりて、用やう心を格

別にして用る也。伊勢物語に蝸の大臣のしのぶ

もぢずり哥も女の返哥に用たる、此心也。

左傳などにも詩を賦すとて、古詩を用たる

例あり。或人の物語に桜を見て、

いにしへの奈良のみや此八重桜

此句は、俳言なきやうにきこゆ。され共よくは云まはし

たり。古本哥本語を取用格也。されど是のみ

にかぎらず、大方此理を以て古人の句をおほ

く見れば、自然に知る也。

定家卿詞云和哥無師匠唯以旧哥為師ト

染於心古風習詞先達者唯一人不詠之哉

第三 發句本意之事

秀句をいかほどよく云おほせたり共、其本意たがひたるは、嫌也。

「6才

かへるさは思ひきられぬ藤見かな

藤見といへる秀句は、人を棄市するわざに藤身

といへるもの有て、身もやすらかにたゞすぎられ

ぬをいへるにや。庭にもせよ山にもせよ、屠所云たて
たるもいかゞにや。是にもかぎらず、

めぐり来る年も羊のあゆみ哉

まめがなてかくす七歩の試筆かな^⑦

両句ながら其故事をあなづる時は不吉の例なり。

聯句などにも、

華乗上^{ツル}二黄蝶^一

藤混繫^二黒牛^一

ト云對句有。

此對字はよく對し侍れ共、やさしき黄蝶にむ
くつげなき黒牛つなぎあはさんも、おもはし

からず。かやうの例もあまた有。さのみほむまじ

き花をことごと敷めづるも又、本意ちがひ

侍る也。まして愛するものをさもしく云いださんをや。

あなゆかし鼠のふんの花盛^⑧

とせば、花への悪口なるべし。とかく聞なれぬ題をすべからず。

接足^{ツキ}て花の枝折^⑨さくらかけ

をらる、花とふまへて、折器と混乱して何れ

もわけなく侍る。

「7オ

雲やこけら風のしらくる月かへな^⑩

此句もしらくる器は月かへな、しらけらる、物

は月なり。しらけらる、もの、しらくる物、一になり

てわけなし。

第四 無心所着の躰

無心所着といへるは、和哥よりも難ずること也。

其有様心を着る所なし。一首にしかとしたる

体なきなり。八雲御抄云、唯そゞるとやあしく
よめば、その姿なきものなり。

わぎもこがひたいにおふるすぐろくの

ことひのうしのくらのうへのかさ

はいかにも、

花は根にかへるの声や先ばしり

足引の山さるや月のかつらの木

これらの句、云かけのみに心を入れて、何共聞へず。平

句など数不知侍れ共、前句にまぎれて一句立

やうなれば、誰も氣を付ず。

第五 歌之制詞はいかにも

古人此詞に粉骨したる詞なり。

月やあらぬ 霞かねたる ほのくとあかし

などいへる詞也。制の詞とて一冊有也。有が中にも

家隆の哥おほし。され共、此一冊に限べからず。

近代の哥也とも、作者ふかく思ひ入たる詞取^⑪

べからず。 久かたの月 をしてや難波

足引の山鳥 の類也。同じ人丸の哥

ながら、足引の山鳥はまくら詞也。幾度よみても

くるしからず。ほのくとあかしの哥は人丸ふかく

思ひ入、珠らしき景氣をつらねし故也。かやうの

詞を主有詞といへり。霞を衣にたとへ、色葉を

いろはにたとへ、霜を柱などの類、千度万度も

新敷く、一言さへくはへばくるしからず。俳諧平句ニも、

稀にあふ夜をばまん丸ねもせい

「7ウ

「8オ

「8ウ

玉子のおやかいそぐきぬぐく 貞徳
 ま虫のさたはおかしませとよ

見るにくへの字戴ヨ入道 季吟
 かやうの類あげてかぞふべからず。姿の字の類、際限なき事也。

第六 き、發句之事 色々有之。畧之。

第七 詞をのこす發句

千代も経ん丁固が夢を春の門
 是丁固が故事也。千代もへんといひ、春の門といへるにて、松といふ事をいはずして、言外にあらはしたり。

星祭る香の煙や蚤のいき 季吟

是は、蚤のいき天へ上るといへる世話也。彼在原の中將、我身ひとつはもとの身にして、と云はなちて、二條の後はましまさぬといふ事を言外に

も(た)せたると、事こそかはれ大方心通ひ侍る也。此体初心ならぬ体也。又、賓主差別の事、假令ば松

の雪といふ時は姿は主也。雪は賓也、客也。又、宿の秋、秋の宿など云心持也。他准之。

發句切字なくてかなはぬ事也。

猶子細有哉。 所願、をの字、切字心持有也。

しの字、むかふしの字はきれ字。過去のし、切字にならず。ぬの字、おはんぬのぬはきれ字。ふのぬはきれず。上に下知して、下に哉ととめ、上

「9オ

にこそといふて、下に哉ととむる事、宗匠はざなり。仕立やう有。

第九 をまはしの發句

花さかぬ草木もあるを石の竹
 どんぐりの木さえもあるを利根草

此仕立やうは、上にさへと云て、下にと押へ侍る也。

句のこゝろは花さかぬ草木さへあるを、此石の竹の

花咲は奇妙也。石や竹にも花さかぬ物なるを、く

らべいへる心、自然に切る也。をの字、切字の所に出し

侍れば、常のてにをはのをの字、切字に成と思ひあや

まり、又、古人のこの句のとまりに、をの字をすへたるを見て、切字かと思ふ人有故、是一ツの口傳。

第九ノ餘リ爰ニ記ス 此先は前ニ記ス

白雲と花咲く木々をみねの雲

かやうなるは切字にてなく侍る。又、物式ツくらべずして

切る有。こゝに一両句あげ侍る。其格は口傳に残ス。

霜にたへしみさほも有を雪の雲

をしかりし春さへあるを年の暮 愚句

祖白の句 暁がた雨はれたる元日

来る春はさはらぬものを夜の雨

此句は、来る春は八重むぐらにもさはらざりける、と云

めづらしく侍るにや。其隱者の身の程を思へば、一入

珠重成るにや。これら、をまはしの句の手本なる

べし。

「10オ

「10ウ

「11オ

第十 三段切發句之事

花はひほ柳は髪もときつ風
織女は何れの薄ぎり雲の帯

則常

第十一 はね字とめ發句

名ぞ高き月や桂を折つらん
哥もなし蒼やめいぼくなかるらん

季吟

第十二 大まはし發句事

あなたうと春日のみがく玉津嶋
花さかぬ身はなく計犬ざくら

古句 元隣

右三通の發句、甚深の相傳有事也。其道の堪能ならずしては、仕立やう知とも無益の事也。僭踰の罪のがるゝに所なけれ共、とてももの事に愚句一句書付侍し。

宗養より傳受の書に云、

永享年中北野万句

御所様御句

みづかきのふりて久しく松の雪

と被為遊しを、梵灯庵主宗匠にて、是は久しきと御沙汰候はゞ、珍重の御句たるべきを、大廻し御存知なきゆへと被申しをきこしめさせられ、御機色あしかりければ、都のすまゐ叶ずして、する河のかたはらに侍しと也。其外二字切、三切字、仕立有事也。又、恋の發句に心持これ有事とぞ。連も五十韻百韻となりしは、梵灯の比よりとなり。

第十三 脇句之事

まづ脇は發句にしたがひて、時節たがひなきやうに打添付たるよし。其上、月、雪、宿、或、草木、鳥獸の名、比留り、又、涼しさ、長閑さと留るも自然あり。發句は客、脇は亭主、第三は相伴人。まづ

亭主脇は、客人發句の御意、そむかぬやうにと心持よき也。時節たがはぬ一の法也。同じ春にても三月にわかち、一か月の中にも、上旬、中旬、下旬と分侍る。同じ時節といひながら、霞などのやうに春三月、

12ウ

わたる物あり。されど、霞にもうすきこきの時節、景氣あり。忠峯のいふばかりにや。みよし野の山も霞て、と讀れしは元日のかすみなり。此いふばかりにやといへるに、深キ心ある事也。同じ上旬にても元日の句に白馬節會、時節違なり。立秋の句に七夕の道具付たるも其心也。此心持肝要也。取なしかつてせぬ事なり。詩の法に起承轉之心能す。

第三相伴人なれば、かけはなれ取なしも仕候。紹巴法橋より玄仍へ遣され候書、脇に五法あり。

13オ

一相對 二打添 三違付 四心附 五比留り
本哥、本語、世話など、大方發句に云残したる詞を取也。發句よりその云残さぬ詞をとらぬ有。いさ、か習ひ有。大小の脇などいへる事あり。先師貞徳老今の口傳。

第十四 第三之句の事

第三、て留、らん留、なへの事也。様子により、に留も

もなし、とも留る事有。貞徳老の第三、紅梅千句に、

春の末天下に名あるほと、ぎす

「13ウ

とこれあり。此留やう、百句俳諧にはなき事也。に留もなし、と留る事、勿論習ひある事なれば、

師傳なき人は得せぬ事と云ながら、又、其習ひを得れば、別の事もなき事也。かやうの曲は常にせぬ事也。只、て留、らん留第三にたけ高く、景

氣うつり、思ひ入ふかく、第三めきて聞ゆるに浅からぬ傳も工夫もある事也。

梅の花見にこそ来つれ雪をはきて

可全

御所車花にくるくみすまきて

梅清

にくや風花と散てぞ吹ぬらん

昌珎

後くも見よとや古哥を集むらん

正慶

「14オ

大方かやうの風情なるべし。前句を聞ざれ共、面白し。第三のみにかぎらず、前句なしに面白き上品の句也。中品の³³迄は前句の光りにて能聞へて、前句なしにはさもなきことなり。それさへあるを、前句をかり前句にもたれんは作者の無念歎。され共、前句にもたる、句を聞知人も稀也。前句にもたれぬやうにと年比心かくれ共、甚なりがたし。

第十五 四句目之事

脇の句のおもふりとは、一くらみ替りて、いかにもかろく仕立たるよし。其故に、てにをは、たる、なり、めり、など、留る由、紹巴の口傳には侍れ共、又、文字にて路、雪、哥など、留りたるもあるなり。連哥には面連哥とて、

「14ウ

かるきを専にし侍れ共、俳諧にはかるきばかりにて、なまつきなるはおもしろげなき也。能心得べき。

第十六 五句目之事

是は、たけ高く、第三のおもかげに仕立たる能也。すべて上句、てどめ、らん留の句は、第三つかうまつる心にて仕立たるよし。

「15オ

第十七 一面八句之事 九句目

八句之事は大方の法度、貞徳の十首の哥をもつて類せし給ふべし。哥略之。

第十八 月花之事

月、面の七句まで、花、裏の十三句目を定座といへり。され共、脇、第三にも花をする也。裏の月はやく出したる可也。月をおそく出せば、花の句につかへてわるし。また、苳の句に月を結する事有。月は四季共有。ゆへに花にひかれて春になる也。花紅葉しては雑也。

「15ウ

華の後青葉なりしが紅葉して

障子のそとへもる、人聲

集りて双六をうつ華の春

身を粉になして棒つかふ也

渡る世やそば切を打花の春

加様の句、他流に多し。花の春に相應とも見へず、前句には能付、花の春、付除りたるとやいはん。又、華の春を

言葉のたらぬ所、たしにしたる様にて聞にくし。
 花の句は、花と云字なくて聞之難きやうなるよし。
 花をよとひたるは花の本意にあらず。月花

「16才

の句、時宜ある也。三人以上の會には、發句の人は
 仕らず。月の句にも時宜ありといへ共、華の句、大切
 成ごとくにはあらず。十三句目、花の定座と定事、
 句毎に我人花の句を憚りて、十三句目迄延し
 たるを、十四句目、下の句にせん事いかゞ迎、十三句目に
 せし事なり。其故に、獨吟か其座の宗匠なれば、
 何方にも辞儀なしにする事なり。又、余人も珍重
 なる句は、宗匠、貴人へ理てする也。月の句、月に
 しのべる、月に晝を見るなど、不然。季を持たせんため
 計に、月に何する、月にかをするなど、月の縁
 なきは聞にくし。

「16ウ

第十九 呼出し花引上華の事

呼出しの花、大方はせぬ事也。裏の六句目より後に春
 の句出せば、花呼出しになる。其ゆへ、裏の六句目以来、
 春をせぬ也。春は三句せずば、かなはぬ事也。六、七、八句と
 来て、九句目より十二句目迄四句なれば、定座の花の句、
 五句去りに一句近き故也。され共、貴人、高家、六句目以後
 に春をせられし時、悪きと云がたし。雑の花、他の季
 の花とは余花、花簪の類、また、花の後青葉なり
 しが紅葉して、と云句の類也。引上の花とは、十三
 句目、こなたに前句、春にてもなき花の句をする事
 なり。裏にても、五句目日本ノマ、ニは春も仕候。花の句と五

「17才

句隔有故也。いづくにても春一句来るには、花の
 句を付、二句、三句来て後は、花の句せぬと云、田舎
 説也。不可信用。九句目より後、高き植物せず、十
 句目より後はひくき植物もせぬ事也。二句去り、
 霧はふり物、聳物両方に嫌也。器物、同じき様成
 物は三句はつゝかず。此去嫌、宗匠の次第にすべき
 なり。
 ○ 是マデハ第十九ノ口義ナリ。コ、ニ第廿二出ル。
 此間關文歟。不知筆者云之。

第廿二 春秋両字添季持句之事

たとへば、春の夕暮、秋の中空、云付たる云に不及。春
 の築山、秋の泉水は、春山秋水と云へる文字もあれ
 ば、水も山も春秋にしたがひて、景氣もかはる物なれ
 ば、不苦。又、春の臺、つまりたるやうなれ共、春臺と云
 字あれば、不苦。詩之題に春女之恨と云へるありと
 いへ共、春の女一向にいほるまじ。詩之題の心は、女は陰
 氣をつかさどるゆへ、春の陽氣に感じて、恋暮の
 心も起るといふ心也。おもひ切つ、世をそむく秋、
 かやうの句も秋といふ字。

「18才

或人之説 連誹十三ヶ條

一 賦物の事、六義の第一なり。則賦之字をクバルト
 ヨム。百韻の全躰此一字より起るなり。此儀は神道今
 出たる也。しかるにより、むさと云べき事ならず。連は
 清浄なるゆへ、必賦物取也。誹は穢れたる事も云出
 すゆへ、とらざるなり。誹賦物取時は、一座清浄也。依

其、長頭丸風に、發句花なれば華の誹諧、月なれば月の誹諧、と端書する也。是は、一字露頭の格也。

一發句は陽也。天地開初一陽起る也。然るにより、如何にも長高く云上也。脇は又、陰也。陰は不断陽に籠りて有故、陰字をする也。陰は陽にしたがふ物なれば、發句により、取寄、天地和合すべし。第三は、天地極て人の道始也。然るにより、發句、脇に目を

「18ウ

かけず、又、發句する心地にすべし。天地人の三才也。元朝の三ツ物と申も、天地人の三才也。四句目、八句め、かるくとする也。面八句は八卦にかたどる。八ツは数字たる始也。裏面有事は陰陽なり。四折は四季をかたどる。百韻も、上五十韻は陽、下五十韻は陰なり。

「19オ

大廻し之句とて、五月は峯の姿風谷の水

右大廻し共、三段共、三明の切字共云也。やの字をくはへてきひて書也。十八てにをはの格也。

「19オ

松白し嵐や雪に霞むらん

音もなし花や名木なかるらん

右の格也。上五文字にて、し、やと疑ひ、扱はねるてにをはなり。

發句のけり留之事

神無月紅葉も春に成にけり

あまた度来てねこそげに喰にけり

右之格也。七文字にて、にとをさへ、下にてけりと留るなり。

「19ウ

第三 もなしの事

木の葉ちる分入山の道もなし

此格也。發句のもなしは、なき事を有様に云たて、第三のもなしは、有事を有様に云也。此替なり。

朝霧に海辺とならぬ山もなし

右に云、なき事を有様にいひなす格也。はなし留も同前。はも通韻なり。

祝言の事

發句、脇、第三の仕様、梅、花、柳、椿、松、若葉の末をか、へたる事可然。祝言の時、松は千代と限を定事心得有べし。花をうへ、小松を植初る心持能なり。但、病人などの所望にて發句するには、椿、卯木をせぬ也。又、つゞきのあしきを嫌。

脇句

ひこからみといふ事脇に有。たとへば、藤などの發句に、松を縁にして這かゝる物なり。然間、一句の内に、松などを取合する也。唯、蒼を賞翫の發句に植物取添事、いらぬ事也。又、口傳大かゞみ、小かゞみ、病者の所にて、蕪などすべからず。山に霞霧などのつゝみたるやうにせず。かやうの事也。第三て留常の事也。らん、もなしに留り、三ツは習ひ有。發句、脇、うたがひか、未来か、下知ならば、右三ツの留めくるしからず。發句、脇、落着の時はせぬ也。是習也。

入る月の空にや待し今朝の月

野辺の小鹿のあとしたふ

里人の真萩かるかのをか越に

秋は見ん花の夏草茂り来て

帰るさは家づとにせん花折て

見んするにて不切。明日も見ん、後も見んなどの類也。二ツ云かけては、見んする也。

「20ウ

是もせんする也。不切。

蒼を見ん朝貝うつすかゞみ草

是は切たる也。

「 21オ

かけ合之句の事

浮草にやどりはかなき秋の月^{④7}

此句やどるもはかなにて能かけあひ候。

首切 衣打浅茅が原に里ふりて

衣打浅茅が原に 此下白紙

あらたのし喰初て酌霞かな

なをも果報のつかへ若もち

花やかなたんざくひろふ有氣入に

但、かなと留り昔はせざれ共、今は脇の作りさへよければくるしからず。是秘なり。

脇の句 薄霧渡る峯の明ぼの

平句の体也。薄霧渡る明ぼの、峯と云ては韻なり。

右云、陰の句の体也。

第三 小船さす袂涼しく月出て

小船さす袂涼しき、とあればよし。涼しくといひては韻字。

遠村の柳色そふ雨晴れて

雨はれて柳の色そふ也。 此下白紙

顕 ^{上ハアキ} 兼 ^{上ハカネ} 慶 ^{上キヤウ}

下ハアキラ 下ハカヌ 下ケイウ

哥ト云字和訓 此下白紙

定家卿

明は又秋のなかばも過ぬべしかたむく月のをしきのみかは

○ 詩變^メ而爲^レ騷^ト 騷變^メ而爲^レ詩

詩は詩經など也。騷は離騷也。屈原作也。辞は漢武帝秋風辞也。

「 22オ

有文 詠て月を猿やほしがる

無 月を詠て猿やほしがる

硯水かとぬるむ樋の口

ぬるむ

説奏^⑨ノ口傳五文字^{男出^テ女^ニ三々}はよし、二四は

わろし。下の五文字^{男出^テ女^ニ三々}き、なまし物を、三五五三よし、四々わろし。」22ウ

ふすま雪すきやの畳も面白にて

志那弥三郎範重、永正の比の人也。近江国に生れて、

摂津国尼崎に住し、晩年に及びて山崎関戸の院辺

に樂居^開せしめ、名を宗鑑と改る也。犬筑波と

云書を作りて、世に弘めし也。それより遙に程^ホふりて、

松永氏貞徳先生、あやしう道に堪たりしかば、ながれ

をむすぶものをほく侍りし中、親重、重頼といふ者、

わきて此門に遊び、天文年中より以来の發句、付

句を拾ひて一集とす。今の犬子集也。其後、二子、

中そばくしう成、剩、師門にもうとかりし親重、

四季に四卷の句帳を作る。一村と云者、清書させて

閑板^開す。貞徳末弟、末吉道節、新に一集を作り

たまへと、徳師へ勸て鷹筑波をゑらむ。山本西武

書^書生^出す。いくとしを經ずして、又、崑山をゑらむ。良徳筆執す。

崑山、玉海、二集の後、尾陽集、

夢見草 砂金集 驚鹿集 牛飼 口真似草

物忘 新犬筑波 捨玉^⑤ 鈍屑 鸚鵡 捨子集

鋸屑 継子立 早梅 懷子 思出草 鄙諺集

埋草 木玉集 落穂 芦花集 絲瓜草

佐夜中山 耳無草 奉納集 遠近草^⑤ 此下白紙

「 23ウ

世に知らぬ心地こそすれ有明の月の行多を空にまかせて源氏⁵⁷

俊成の源氏第一の哥といへり。

我宿の榎色づく夕日影

しらぬ小鳥のおほくあつまる

かねてより思ひし事をふし芝のこる計なるなげきせんとは加賀⁵⁸
なきぬべき夕暮なれど時鳥またれんとてやつれなかるらん少将

夏の柝虫

晴間なき雲よりくれて夏の夜の明るも遅き五月雨の空大納言実信女

勝月星

星ひとつ見るにその夜の嬉しさは月にぞまさる五月雨の空長嘯」24才

此下白紙

百人一首

○天智天皇作者次第立様、第一、第二、第三、第四 心得有。卷軸、又、卷頭立様也。天智、持統、人丸、赤人、

卷軸、順徳院、後鳥羽院、家隆、定家也。後鳥羽院を卷軸に置べき儀ながら、卷頭立様之例にて上^二

兩人宛置ゆへ、又、下にも二人宛置也。首尾相應

也。秋の田の御哥、民を憐み給ふ天子の本ゆへ卷頭

づ、心を籠つ、。

○人丸六代帝の師 足曳の、待戀哥、幾夜くも待。

第三の臣也。哥道の臣也。此哥五首、卷頭長哥の末に反哥有。

○赤人、垢ときこえぬ様に赤きといふやうに、

○鶺鴒の哥、堺傳授、寒夜の哥也。寒夜のけいき能く思ふべし。

○仲磨餞別振は心なし。さけ遠也。振散遠ケミレバ。

○喜撰五首の哥、堺傳授へも入也。キセンヨミクセ有ト云ハ、非

也。ウイ山トハ、ナントシテラシヤルノ是ホドサハラヌ世ノ中ヲト云、

衣ホストハヌグナリ。⁵⁹

六哥仙の内、時代不同の哥合、公任補註、

○小野小町、衣通姫、ながめは花のゑん也。世にアリフル、

○蟬丸深草盲僧 博雅三位、琵琶習に百夜通立聞。

○参議。

此下白紙

相傳一大事秘切紙式拾五ヶ條ノ内七ヶ條⁶⁰

およそ大和哥は、言葉をもて色々工ミ、又、心を延待る

事なれば、てにをはをもて要心とする。されば、至る相

傳にして未心外にあらはせずといへ共、ひそかに是を知べし。

第一 はねる事口傳ノ秘

覽とうたがはん事。か、かは、かも、何、なぞ、いかに、いつ、いづく、や、いく、など、是等之事、誰も知

れぬ事也。其證哥しるすに不及。朝夕もてあつかふ事也。⁶¹

第二 治定しての事

思はん、見む、ねん、けん、なん、

此類と知るべし。いづれにもか、はらぬはねなり。

第三 つめてはねる事

是は、か、へ字有。さへ、だに、そ、をば、⁶²わで、此五ツの詞を入れてはぬべし。多は無用の事也。たとへば證哥、

春日山みねの木の間の月なれば

みぎひだりにぞ神守るらん

此、にぞに習ひ有事也。にぞはにやなり。

」24ウ

」25ウ

」25才

道遠し夕日の原のつぼすみれ

春のかたみにつみて帰らん

此かたみにの所、まはしてにをは也。字を一字かへて可聞。

「26才

第四 か、への字を畧したる事

覽留り、つめ、はねとてふかき口傳有。姉小路殿、龍

本寺殿、澤惠、源政直、御相傳のその一字の留りあまた

有。く、す、ぬ、ふ、ゆ、む、る、に、つ、ぞ、ト云。我ぞとふ、

花ぞ咲、泪ぞ袖に玉はなす、浪ぞたつ、問ぞこぬ、

人をぞ頼む。

如斯、のべてもつゝめてもよし。猶、右の外に秘の極々有。

ね、しに、しか、きし、を、は。

から衣日も夕暮になる時は

かへすくぞ人は恋しき

水のうへにうかべる舟の君ならば

爰ぞとまりといはましものを

花をぞ見る、月をぞ見しに、松をぞ友、思ひしか、

君ぞしらん。如此、吟をうるはしくとむべし。是ふだん

眼前に山く有事なれ共、かくとしる、さては知がたし。

第五 留りを用ぬそ有事

とまりを用ぬその字有。下知のそ、かくはなせそ、人などがめ

そ、此類也。そとやと延ちゝめかよひ侍る。たとへば、

武蔵野のかすみにしらずふる雪にまだ若草のつまやこもれる」27才

是は、そをのべたるや也。つまぞこもれる也。大切の秘也。是

等は、初心の云事にあらず。しりてもしらで、相違のてに

をほと人の可聞。又、聞知耳もまれなるべし。證哥、

春日野に子の日の松は千代そへつ、も猶神ぞ引らん

ぞとのとの、てにをはの通へる、是にかき

口傳なるを爰にあらはし侍る。

きのふまで早苗とりしがいつの間にな葉そよぎて秋風の吹

いつをにととめ候故、そよぎてと留、秋風のふく也。

折つれば袖こそ匂へ梅の花有とや爰にうぐひすの啼

こそを匂へとおさへ、有とやを爰にと留。鶯のなくは鶯ぞ啼也。」27ウ

のと云時は、とまりにか、へ有。大事、右に云その字の

留、いづれにてなくては不叶。

春来ても花も匂はぬ山里に物うかる音に鶯ぞ啼

山高み人はむかしの跡ふりていまよりさきに軒ぞかたむく

右是等能く味へ、心にそめ給ふべし。秘事はまつ毛

とは、かゝる事なり。

しめ置て今はと思ふ山里のゑもきか本に松虫の啼

東路の佐野の船橋かけてのみ思ひわたるを知る人ぞなき

をぞ、とぞ、ても、是等、ぞ、か、よの三字に通侍る。とぞ、とか、

とよ、かやうの類也。君が心ぞ、君が心よ、君が心か。

又、云捨るぞあり。非下知。證哥 かやうの類多し。

御被して結ぶ川浪年ふ共いで淀むべき水の流れぞ

第五 こそのとまり

こそといふ、れと留る事誰も知れり。れの五音、ゑ、け、

せ、て、ね、つ、め、に、れ也。物をこそ思へ、人をこそまで、有と

こそきけ、花をこそなは、いこそねられぬ、それとこそ

見め、こそと云てととまるてにをは、俊成卿へ定家三

「28才

年の間とひ給ふに、答へ給はず。思ひあたり給へと計、
哥を捨られよと仰あれば、其時おもひあたり給ふ
といへり。

「 28 ウ

月をこそ見もせね雨に夜半更て

此類也。こそと云、せねとをさへて、後はてととまり、如此。右
の外、又、大事の留り有。しか、を、しに、よきに、にきか。

花す、き我こそしたに思ひしか コソシカ也

穂に出て人にむすばれにけり

霞こそ立こめけるを鈴鹿山 コソ、ケル、ヲ、ト
ヲサヘタリ

春になるとはいかにいふらん

月こそ月よ、我こそうらみはつべきに、又、いひのこすこそ有。

春も過秋もくる、とかぎりあり

人もあひ見ん事をのみこそ

事をのみこそあれと二字残す也。あれを添て可聞。⁸⁰

是連哥に十九てにをはト云、
又、下の句十六てにはナリ ごと、こそといふにも、とまらぬ

事侍る。是ふかき口傳。又、とまるてにをはあり。

おほかたは松の千年はふらね共人の言葉は君ぞかぞへむ

如此とめたるは、君ぞはの也。右に此儀有。是等はよくく

心を付すべきの耳と云はる、事、可聞第一ノ事なり。

⁸³返々心を付て聞侍るべし。猶又、

血のなみだ落てぞ瀧津白川は君が代までの名にこそ有けれ

血の涙落てぞ、のぞとまり、なしととがむべし。瀧津の津

の字にてあつかひたり。是等の心得聞所をそ、ぐ。

神通も習はずしては、しるべからず。口傳にして申

残す儀なれ共、御執心ふかきゆへ、皆々はだかに

「 29 ウ

して云あたへる也。名にこそありければ定りたる儀也。

第六 やの字の事

十三ヶ十四ヶといふは、やの一字に極せり。⁸⁶ 先、や文字に
七ッ次第あり。名をしる人まれなるらん。⁸⁷

一切のや

二中のや

三捨るや

四疑のや

五はのや

六すみのや

七口合ノや

散る花や嵐につれて通ふらん⁸⁹

鳥や帰る雲や霞に日を入れて⁹⁰

やと云てとまり、口傳のや也。それや、これやと数を

二色も三色もいはん数のやとも云なり。

かくしても身のあるべきに思ひきや

思へばやからす啼までとまるらん

今ははやとはじと月に鳥啼て

てととむる習、くるしからず。然共、月に今にもし

にてをさへ、てと留たり。

思へやとあふ夜も人をうたがひて

他准之。下知の詞にも似たり。

月や花よる見る色のふかみ草

雪や、氷や、花や、月や、此類口合といふ。かつらぎや、

「 29 オ

「 30 オ

「 30 ウ

小初瀬や、此類よび出しやと云。花や咲らん、雪や降らん、疑のや也。心ならばや、人とならばや、ねがひたるや也。

冬川のうへは氷れる我なれや下にかよひて恋渡らん
是ははねるや也「31才

道あれや、いとまあれや、人なれや、有や、皆をしはる、や也。

第七 めやの事

めやうたがひのこゝろ也。又、やはと同じ。

世をすてば日吉と跡をたれてける心のやみをはるけざらめや
此めやは、はるけべしとなり。

いたづらに皆花桜さくら麻の生の浦波むさしこへめや

思ひ川絶ずながる水のあはのうたかた人にあはできえめや

第八 めやとやは同じ心にて成也 證哥

老にける尾上の姿のふかみどりしづめるかげを余所にやは見ん

○見やせん

「31ウ

又、余所には見えまじき也。二儀あり。

子の日するまがきが内の小松原千代をば余所の物とやは見ん

千代をば余所の物とやはか見ん、たゞ、君が上と也。打かへ、てにをは也。やはといふ内にも、はを休字にしてやはといふ事も有。花やはちらん夜半のあらしに、此類なり。但、ちるらん也。是等聞遠き事也。いかにも能吟味して可聞。

又、句作も詮可有。又、やはと云べきをばを畧して、只やと計云へるも有。はの字添て可聞。

秋の田の穂の上照らす稲妻の光りの間にも我やわすれじ
行やらぬ夢路をたどる袂には天津空なる露やをくらん

右、両首のや、はを畧したる也。能心を可添。

第九 とや 問かけてにをは

問かけとは、

うつゝにはあはぬ氣しきをつれなくて

見しをば夢にいひなさんとや

云なさんとや○つれなしと添て可聞。

くちはて、夜の衣を返すかな

しづとけしとやあはれなりけり

とやあはれ 思へかし也。

休たるやの字あり。ふるや霰、さすや夕日、此類也。

自他准之。

第十 哉とかといへる事

夕月夜さすや庵の柴の戸に淋しくもあるか日ぐらしの声

此哥のや、中のや也。数の中也。然ゆへ、此やにひかれて、哉

とはいはれ有か。此か、哉也。

浅みどり糸よりかけて白露の玉にもぬける春の柳か

これも哉なり。

第十一 しかのてには

思ふどち春の山辺に打まれてそこともわかぬ旅ねしてしか

有明の月も明石の浦風に浪ばかりこそよると見へしか

右のしか、大かた過去のしに通侍る。

第十二 しをのてにをは

「32才

「32ウ

「33才

しをと云も、過去のし也。かを休て、いへ事も、又、
ねがふ心もちゆる儀も有。能々味へ侍るべし。

第十三 かは之事

かはと云は、やはと同じく通侍る。

きふのみと春を思はぬ時だにも立ことやすき花のかげかは
花待かげはやすからぬ也。此かはの詞、花の陰やすくは
あるまじき也。やはに同じ。

明石濁色なき人の袖を見よ心に月はやどる物かは

是は、やどるまじき也。かはいひても、はの字を休て、かに
よむ習もあり。

「33ウ

いかならん岩間の中にすめばかは物うき事のきこへざらん

あふひ草てれるは神の心かはかげさす方に咲なびくらん

此両所にて、能合点あるべき。他准之。

第十四 かの字休めの事

郭公今朝の朝氣に啼つるか君聞らんか朝寐やすらん

右のか、皆、休め字なり。

第十五 しをと云をきそ句の終に多シ

いひのこす事あるなり。

我恋のあらはにもゆる物ならば都のふじといはれなましを

是等は、しをとをさへ、理はる姿も有。又、都のはに有ぞ

「34オ

なり。又、しをヲ、をと云残す事も有。

物おもはで只大方の露にだにぬるればぬる、秋のたもとを

如此もあり。これは、しをに同じ。

第十六 かへしのを

行かへる八十氏人の玉かづらかけてぞ頼むあふひてふ名を
是は、あふひてふ名をかけていへる計也。物をと云事、
これは、云残すてにはなり。

しら玉の何ぞと人のとひし時

露とこたへてきへなまし物を

祝子がいはふやしるの紅葉ばも

しめをばこへてちるといふ物を

物をと云て、ことはる哥に、

散ると見てあるべき物を梅の花

うたて匂ひの袖にやどれる

物を、のをの字、ぞにかよへるゆへ、ると留たり。

第十七 畧する事有

へだてなく入日を見ても思ふ哉

是こそ物のかどでなりけり

哉と云、又、こそと一首にいひ、猶、けりと留る事、口傳

の第一なり。此てにをは、初心のする事にはあらず。

春たてば花とや見えん白雪の

か、れる枝にうぐあすの啼

此哥、鶯の啼、上にて、うたがひたるゆへのなく也。ぞ

とあるべき所なれ共、ぞにかよふ、の也。

雪ふりて年のくれぬる時にこそ

終にもみぢぬ春も見えけり

萬、是にてしらるべし。こそといひ、ぬと留め、ウクスツ

「35オ

「34ウ

又の連聲にてをさへて、けり也。

第十八 てにをは不足にて讀残す事

有明のつれなく見へしわかれより

あかつき計うきものはなし

是は、見ゆるあか月より、見ぬあか月までをたゞせり。

月見れば千々に物こそかなしけり

我身ひとつの秋にはあらねど

是は、我身ひとつの秋のやうにたゞせり。

第十九 か、へなくして云間敷事

はげしきに嵐、あるゝに海、古郷、駒、如此類

思ひよそへ、いかほどもあるべき。

からきに、しんろう、塩、其外可有。

塩といへばなべてもからき世の中に

いかであへたるたくみなるらん 忠峯

此あへたるかんにんなり。

そゞろを、すゞろと云には、芦、萩、薄、篠、

などか、へ有べし。しほるゝを浦によせ、しほたる、

と云を、又、不慮をすゞろと是を云。俊成卿哥に、

難波人芦火たく家に宿かりて

すゞろに袖にしほたる、かな

左大将家の哥合に、春の駒をなはたつとよみしを、

あらし言葉にして、品なきよしを難ぜり。されど、

古哥に名の立事をよせて、詠たりし也。

「35ウ

「36オ

第廿 魂入ぬてにをは

只、猶、だに、さへ、いやまし、いとゞ、つゝ、それより、

是なを、それだに、是さへ、日々に弥増、いとゞも

心得可有。つゝは、秘の一なり。一色を云時は、もつて

の外のあやまり也。くらべ物なくてはあしく候。

田子の浦に打出て見れば白砂の

富士の高根に雪はふりつゝ、

此つゝ故、名哥也。田子の浦と富士の景をくらべよめ

るさま、俗に花を一枝づゝ、又、一枚づゝと計云に

て、可有合点。

第廿一 假名を休むる事

しも、かも、やも、はし、みちし、是等の詞

は、今はしも、誰もかも、立ても居てみしも、

をに、をて、をと、此六ツの假名くはへて云

べき。ふりみ、ふらずみ、みるゝ、こふらくなど

にて休めたる事、今の世に用捨あるべき。他准也。

第廿二 もの假名之事

是、一首一句に数多送る儀あり。

秋の夜は月のかつらも山の端も

嵐にはれて雲もまよはず

如此、それもこれもと云儀なり。

第廿三 やの字の事

や文字数多有。心のかはるは申に不及。同じ心のやを

「36ウ

「37オ

もあまたよみたりし。月やあらぬ春やむかし

「 37ウ

第廿四 隔句之事

いかで さてなり

かつらぎや夜半のちぎりの浮橋や

絶てかよはぬたぐひなるらん

此類、やにてもへだつる也。又の文字にてもいへり。

五月まつ花たちばなの香をかげば

むかしの人の袖の香ぞする

是は、もんどうの詞、一首の内に隔句也。

第廿五 同字の有事

同字の病とて嫌ふ儀なれど、一首一句に其感

「 38オ

よう有時は能一と也。たとへば、

心かへずするものにもか行恋は

くるしきものは人にしらせん

此内に八文字二ツ有てかしがましけれど、是

一首の詮の八もじ也。

物思ふ袖より露やならびけん

秋風吹てたえぬ物とは

是も物の字二ツ有。是ふかき心得侍る。かう

やうの事、幾千万つくしがたし。廿五ヶ條如件。

外に口傳之儀、書加へ侍る。七ヶ條之事

「 38ウ

第一 哉の字に心有事

第二 をに通ふに にに通ふせ之事

第三 もとのとにと通ふ事

第四 比留り之事

第五 にて之事

第六 して留り之事

第七 見ゆ留め之事

第一 哉

ねがひ哉 誰もしれる事ながら。

多ともこたへぬ空の春みどり

むなしく果ぬ行すゑもがな

又、てにをはの哉あり。

東路の不破の関屋にすゝ虫は

をるやにふると思ひける哉

是は、てにはの哉なり。又、治定したる哉。

忘れては打なげかるゝ夕部哉

我のみしりて過る月日を

月哉、花哉、此類、つね々石瓦思ひあやまる

事ゆへ、結句、是を能心得よとの師傳ゆへ、七ヶ

條の第一書なり。

「 39ウ

第二 をに通ふに にに通ふせの事

千早振神代もきかず龍田川

からくれなゐに水くゝるとは

にはを破りて、のになせといへり。

第三 もとのとかよへる事

是を能味へてゆうげんに仕立儀、此道のかんよう也。

又、云かけてにをは、すみにごり、格別のかはりめ有。

みかの原わきてながるゝいづみ川

いつみきとてか恋しかるらん

君により我身ぞつらき玉すだれ見ずば恋しと思はましかば

かくとだにゑやはいぶきのさしもぐさ

さしもしらじなもゆるおもひを

右三首の清濁よく合点可有。

第四 比留りの事

山河の岩間もとぎゝす啼蛙

いつかいぬる五月の比

春はたゝかすむ計の山の端に

あかつきかけて月出る比

我せこに見せんと思ひし梅の花

それとも見へず雪のふる比

白氏ガ詩

琴詩酒友皆抜我 雪月荅時最憶君

此時と云字入、よき比留りといへり。

第五 にてのてにをは之事

わくらばにとはれし人も昔ムカシにてそれより庭の跡はたえしき

秋津嶋外まで波は静シずかにてむかしにかへる大和言の葉

物ごとに忘れ形見の別れにて

嵐さえ花の夕のかたみにて

入相の鐘のひゞきのしづかにて

霞たつ遠山本の長閑にて

「41オ

にてのをさへ、う、く、に、つ、ぬ、ふ、む、ゆ、る、のを
もからぬ、此假名かへにてと、とむべし。

第六 してのてにをは

これもにてと同じ。

今よりも契りし月を友にして

第七 見ゆ下の句どまり

う、つ、く、す、ぬ、ふ、む、ゆ、る、是にてをさへて見ゆ
と留べし。見ゆ留め、連哥には面八句の中には早し
と、紹巴の批言ありたれ共、誹諧にはくるしからず
と、師のいへり。

箱根路を我越えくれば伊豆の浦や

沖の小鳥に波のよる見ゆ

あそぶ見ゆ 浪のうつ見ゆ 立つゝく見ゆ をしゆ

みゆ 他准之。此外ににがし共、見ゆどめ也。

鶏冠井氏令徳 在判

追而曰はね字の發句 宗祇一代一句

名ぞ高き月のかつらやをりつらん

大まはし

あなとうと。此丸の所子細有。句は右のてにをは書が有故略也。

春といへばのどけき物を今朝の雪 昌琢

こゝろにとがめたり。右同じ。まつ毛く。

切紙秘傳良葉抄

一歌、連、誹、に可嫌病之事

目錄 式拾五ヶ條

「41オ

「41ウ

「42オ

一 親句 一 疎句 一 六義 一 風鉢 一 四道 一 賦ノ歌
 一 祈祷發句脇 一 追善上同 一 神祇上同 一 呪咀上同 一 軍場上同 一 一軍場上同 一 一詞病哥連誹
 一 發句切字 一 一蒼ニ桜ノ付様 一 一桜ニ花同上 一 一漢和 一 一和漢 一 一詞病
 一 同字病 一 一風塲⑤ 一 一首尾病 一 一懷紙⑤ 一 一乱思病 一 一二四不同
 二六對下三連⑥ 抑古人多哥連誹等に病ノ名を付。
 いはゆる四病八病等有。竹園抄にくはしく書しるせり。
 先以、連哥誹諧に第一用ゆべき処、十ヲ⑧か一證哥
 書出し侍る。

第一 親句之事

一 親の字訓 ムツブ シカシム ムツマジ ミツカラ 如此。是にてよく
 思案可有。親句に二種有。一ツには響の親句、二ツには
 正の親句。響の親句に二種有。五音連聲、五音相通也。
 人問て曰、五音相通とは、アイウエヲ、ラリルレロ、此五ツ、
 いづれもつゞきてよし。

朝霞森の木ずゑもみえぬまで

立かくしけり花のかはして

「43オ

此哥、霞のみと、森のもと、マミムメモの五音。までので
 と、立かくしのたとタチツテト。かやうの哥多し。書出す
 にいとまあらず。祝言の發句、脇、第三に口傳、是なり。
 又、五音連聲、五七五七々のひゞき切ざる哥、たとへば、
 ほのくくと遠の外山に啼来たり

しばしかたらへねぐらさだめて

如此、ほのくくとのと、遠のおと、ひゞきにて通ふなり。

外山にのにと、来鳴のきと、いのひゞき通ふ也。又、にとき

はイキシチニなり。猶、たりのり、しばしのし、是もイキシチニ。

かたらへと、ねぐらのねと、ゑのひゞき、是等にてしらるべし。「43ウ
 哥には五句のつぎめひゞきはなれざるを、五音連聲
 のひゞきの親句と云也。祝ひの哥の儀也。是を誹諧
 の第一の秘なり。おそらく天下に知る人、紹巴以後
 あるまじ。巴も能心得ながら、かやうの義、初心に
 しらしめば、かへりて連聲のさはりならんとて、かつて
 其儀人につたえず。いさ、かもつて他見他言ある
 べからず。

一 正の親句と云は、響もつゞかざれ共、詞の切ざるを云。譬ば、

吉野山みねの桜のちりしより

花はあだなる物とこそしれ

「44オ

是は、芳野山と云、やがて峯とつゞけ、桜と云、ちると
 云、花とあり。如此哥を正の親句と云也。万徳の中
 の其一也。常の誹諧、發句、脇、第三、此すがた能
 々心得有べし。五音も連聲もなし。是返々、
 常の句可然。五音連聲は祈祷、夢想、脇、第三。軍
 陳等の發句、脇、第三。其外は試筆、三ツ物に一代
 の内に二三度計用ゆべき也。度々いたす儀にあら
 ず。今時間しらせ給ふ御方は、忝も禁中様方、御公家
 衆外はあるまじ。

為家 為頭 能基 空恵

「44ウ

此四代の秘書にしろされ、三條西殿、其外玄旨法師
 より長頭丸に御相傳をうけ、今又、年来の門弟三人
 にゆるし給ふ。予も存命をしらざれば、御執心の
 御方へ如此。

第二 疎句之事

右いへるひゞきも通、五音も連聲もあらざれ共、心のはなれぬ事、是能くてびろき事也。是を哥、連哥、誹諧につねぐ用ゆる事、一ノ一也。又、第三の句作り、三段にと云秘事有。譬ば、

小男鹿の入野のたちと声更て 宗長

小男鹿の声更て、とつゞけ度所なるを、入野、立、と中に云たるは、第三の大事の様也。宗積第三、

夕月夜さすやかりほの秋更て

これも夕月夜秋更て、など有度を、如此。

藤孝ノ第三

長閑なる月や軒端に更ぬらん

昌叱ノ第三

白雲を花の名残の雨はれて

是等の句作りにて、能く御思案可有。平句と第三のかはりめ是なり。又、名人とて、はやき千句などには、さなき事も有なり。右第三の仕やう、疎句とはいへり。又、去人はいかい、

帰る厂かいぐ友の聲待て

是等は平句のやう也。習ひなき人のわざか。其門弟とて、

華の比誕生日の祝ひして

猶、同じ。右とくらぶるにはあらね共、長頭丸第三に、

花やかな短冊ひろふ有氣入に

かやうの句、姿能御覧候へ。かく申愚拙も習ざれば、慶安二曆までしらず。あさましき句躰可多。此第三

の句の次目親句也。

アカサタナ〇有
下ノ句ウクスツフ也。

第三 六義之事

一六義の中に賦の字はツクバル、如此よめり。されば、一首の内に事をあまたつくし讀る哥也。發句も是に同じ。此賦の字、懷紙の端作りに置事、本式目にくはしくしるせり。

第四 風躰之事

是に十ラの次第有。此儀は竹園抄にこまぐあり。是を能御覧可有。發句、脇、第三の十躰也。是を工夫可有事也。

第五 四道之事

譬ば、本哥を取るに言は、むかしのごとくなる心を取りかえて、あたらしき句作にする事。たとへば、

心あてにをらばやをらん白菊の哥を、古人の發句に、

心あてにをらばやおらん賣扇

又、大学の詞、邦幾千里と有を、箒に取かゆるの類なり。

○心は同じ事なるをいひかへて也。

○本哥の上下を打かへて讀也。

○本哥の大意を取也。たとへば、哥に、

桜花㊦それ共見へず久かたのあまぎる雪のなべてふれ、ば

是を取る哥に、

桜花㊦それとぞ句ふ久かたのあまぎる雪のなべてふれ、ば

こゝろはむかしのまゝにて詞はかふる哥、

月やあらぬ春やむかしの哥を、

春やあらぬ花や昔の春ならぬ詠めし我はもとの身にして

かやうの哥数をしらず。たとへば、誹諧に松の木、松茸、

松山、松虫など、わくるさま也。他准之。發句等類の

「45オ

「45ウ

「46オ

「46ウ

「47オ

のがれも春やむかしの哥にて能々聞べきもの也。

此四の道は、詩の七言四句にも通ひ、天台四門の有門、空門、非有門、非空門の四品と同じ。佛祖不傳の一大事也。哥の返しに四の道有。末へに記す。懐紙四枚も此儀をもつてなり。^⑧六義は六のちまた、四道は四生也。此四道連誹二ツの第一の秘事なり。

第六 賦之哥の事

竹蘭抄六義の処にくはしく見へたり。これをまもられ、はいかいにも用ゆべきなり。

「47ウ

第七 正之親句前に書也

第八 脇句對言と云秘事有。譬ば、

桜花咲にけらしな吹風の匂へる方になびく白雲

さくら花と云に匂へると對し、又、吹風に白雲といふがごとし。

詩 氣霽風梳新柳髮

氷消浪洗舊苔鬢 如此シ

氣はれに氷きへ、風に浪、新柳に舊苔、けづるに

あらふ。

「48オ

山頭夜戴孤輪月

洞口朝吐一片雲

山影入門推不出

月光布地掃亦生

是モ上同

此影の字、山かげに陰、此かげを書べき処なるを、此影の字此作の玄一也。能々合点有べし。又、景氣にて侍る。

「49ウ

祝言、神楽、夢想、發句さまざま有。とかく發句したがひ、あまさず付べし。發句は親、脇は子、第三は客人とこ、ろへ付べし。 宗磧 發句

鹿ぞ啼妻やぬる野、萩が花

此句てにをはずと云て、又、や文字置やうの習ひ秘事也。

廿五條、てにをはず五音の所にぞと云て、くとおさへて、是はうくすぬ也。如此の文字にて留めて、又、跡にやといひてはよし。習ひなくてしりがたき事也。此鹿ぞ啼に、^⑨

穂に出る薄誰ながむらん

是は、宗長の句也。付心かように付たるあめり。又、脇にはねたる事、上手一代一句也。今時、名人迎もする儀にあらず。しかはあれど、覽と書は一字なり。但、

如詩韻。^⑩

宗磧の句に、

みるめかれあふてふ濱の今朝の雪

宗磧^⑪

「49オ

姿にこぼれる月はかゝりて 宗長

とあり。て留りの脇前代末聞也。上手一徳と云。本式目の比や、則自注にも是より外は有間敷とあり。又、誹諧ニ、

賣かいは空ねも高きほとゝぎす

植木のそらはたちばなの庭ト 愚

侍れば師長点也。兎角時節相違なきやうに、初秋な

どの發句に身入冷し。^⑫ 初塩、初嵐、潮寒など付

べからず。雁渡る等は、みな秋半より末の言葉なり。

發句、脇、第三等に休め字、かならずく、むやくはたゞにし^⑬

などの類也。休字あれば平句ならじ。此儀眼毛のごとし。又、古の句に、

雨ぞ染るこんかきくけこ五いんのしやう

あいうへをいて布をまつ秋

これらにしらるべし。

第九 祈祷之事

先そのおもむきを能々聞たづねて、心得、第一の儀なり。興行の人の家に指合不苦の心得、誰もしる儀也。面八句に、先作りの病なきやうに可被成。泪は恋なれ共、袖の露、袖の雨とすべし。もし嬉し泪は可然。

「50オ

後 第十一 神祇

神へ手向の發句等は、疎句にて仕置たるが親句の姿にまされり。其子細疎の訓おろそかならずと讀、又、人のあゆみをはこぶ心籠るゆへの下心と聞へたり。脇、第三、親句たるべし。

前 第十 追善

疊詞、送り字、猶増、并文字餘り、無用の儀也。貴人へ追善一折など奉る時は、上包もひだり前につゝむなり。平人同前の方へは常のごとくしる也。

第十二 咒咀之事

發句、切字置所により、首切胴切と云儀、心得第一なり。たとへば、五文字に花やちる、如此。花やと、ちるのちと五音もつゝかず、連聲もなきを首切也。花やあらぬ、月やあらぬ、花や春、月や名に、かやうなるはよしアカサタナ、ハマヤラワ。又、

「50ウ

五文字と七文字の折相も、如此。右二色を首切と云也。又、どう切とは、七文字の四文字目と、猶、七文字の終に切れ置、五音もひゞきもなきを胴切と云也。秘の上の秘也。

第十三 祈祷軍陳の時咒咀之事

御武家方しろしめされずしては、事の外大事也。太平記千破劍城によせて、

さきかけてかつ色見せよ山桜

との句作り一句はよきやう也。長崎九郎左衛門師宗作と有。さきかけてのてと、かつ色のかとつゝかず。是等を首切といふべし。此脇を工藤次郎左衛門、

「51オ

嵐や花のかたきなるらん

と付たり。嵐や、とうたがひ、るらん、と留、又、句の腰も五音連聲もあらず。城中に聞て、一道の名人、よせてになしとて直したる句、

さきかけはかつ色見せよ山ざくら

嵐は藤がかたきとぞ成

両句直し、工藤が藤の字に當りての作、為相疎とかや。然るゆへ、軍によせて利を得たりと紹巴家の集に自筆の書有を、玄旨公へ渡され、又、長頭相傳を得たり。又、頼朝公發句あづまかゞみに、

頼朝がけふ水軍に名とり川

是等にて能しらるべし。前代未聞の秀逸の手本とかや。頼朝がけふカキケケコ、猶、軍に名ナニヌネノ、季のなき發句、むかしは多シ。并其切字なくて發句にてはなし、といふ人少々有げなり。其切字事

「51ウ

一大事の習ひの手本也。玄旨法印の句に、

からたちはやがてそのまゝきこく哉

からたちはのはと、やがてのや、連聲也。そのまゝきこく五音連

聲もなき旅軍の下向の跡をしたひ、こぬ所の祝の作

意あげて、かぞへがたき名匠の名言を、今時の人、季

なしと直し、發句帳に加へ侍る事、神慮もいかゞ。を

そろしき義なり。 畠山重忠

夏山や思ひしげみのこがるゝは

是は、曾我兄弟の心の句なり。夏山やと切たるゆへ、か

たきも其身も同じ。 明知日向守句に、

時は今あめが下しる五月かな

是は、てうぶくの心なれ共、習ひうすきゆへか、程なく御

身の上にむくへり。今のまと、あめがのあとアカサタナハマヤラ也。是は

連聲悪候。句の尻にて切給ふ故、秀吉公中国より

立帰り、尻を切たまふなり。

當代権現様関東御出陣の時、

茂るとも葉柴は松の下木かな

兼如作也。茂る共のもと、葉柴の葉、五音もなし。是

はかたきを切、又、下木も相手の心也。下木を切たる所古

今有間敷作也。是にて思ひあたるべし。如此事、

日本の私の儀にあらず。越王勾踐の戦に越王打

まけて籠舎の時、范蠡詩(を)作り魚の腹に入たるに、

西伯囚差里 重耳走翟

皆以爲王霸 莫死許敵

セイハク○ユウリ 此所連聲 トラハレ○テウジ 此所連聲 王霸タリ○死ヲテキニ 連聲 是

にて本意をとげ給ふ事しろしめすべし。其例千万た

「 52 オ

「 52 ウ

「 53 オ

り。是は、口傳の儀にて書記す事にあらざれど、如此。是詩の事本マ一原しくも書あたへず。秘可有。又、声は聲、讀は讀もあり。

第十四 卷頭切字之事

いづれにても卷頭の時、うたがひの字致さぬ儀也。下知ぞ、哉、ぞよ、大方此分可然。返々うたがひの字あしく、親句疎句毎度仕る事にあらず。自然の儀也。此事初心の聞しるやうに吟、かまへてくむやく也。右申ごとく、元日三ツ物等にも度々はせぬこと、君貴人の脇、第三仰付たまへる時、下

ごゝろにもちてすべし。

第十五 新宅わたましの時

發句、脇、第三不及申に、煙火の字、夢く不可致。百韻ながら其心得可有。句を吟ずるにも跡ばりに云出すべし。執筆の書にもいづれも句毎の韻字に水たまりを畫

事也。是第一の習ひの秘事也。しる人有間敷。又、清書懷紙も間尺に合せて、病難災難の尺にあたらぬ所

にたつべし。紙(に繪)を好むとも其心得可有。

第十六 花に桜梅草植物に花付やう

苕に桜付る大事は、大かた似せ物の花に桜は可付。真の花桜なれば同意なるゆへ、心得の習ひ是也。前句何れも人の句也。

前句ごとく、し花のしらべのいとまなみ 愚拙
かつこをうつて桜待袖 良徳

如此付侍れば師よしといへり。

「 54 オ

「 53 ウ

前句真最中と咲梅が枝

なみ木よりきやうこつ遅き花待て 同

「54ウ

かやうに、前句と格別にきこゆるさまよし。

前句いつさかん草ぐどもや御簾の前

木末の華は今ぞ最中 同

前句、草と有故、木の字入る所大事の習ひ也。

前句桜咲時は心うきにうき

舟で幾木の花をけんぶつ 同

幾木と付る故、別くの華なり。

前句毎年みもやさらに梨の木

種々咲花の染きぬ袖ばかり 同

「55オ

前句盛なる花の都はの、めきて

なんぼ奈良ぶとます八重桜 同

右、付句みなくよき句としてしるすにあらず。是にて

付肌、分別可有。自餘准之。兎角く前句の

木と各別にきこゆる所、第一の習ひ故かくな。大方

は花の句、いくなみ木、何木、數く、餘多の花など、句作

詮なり。

「56ウ

後 第十八 二四不同 二六對 下三不連

是は、詩の仄平の字、置やうなるを、下心に持て脇句に

用ゆる事、本式連哥の時節は専もて遊びけるを

其後略して初心もとづきかぬるゆへなり。

「55ウ

前 第十七 漢和々漢之時

和漢の時、和の方に聲の字用ゆべからず。又、韻字取

こすべからず。韻に用ひたる後、中込に遣ひたるはくる

しからず。漢和の時、仄おこり、平おこりを聞て

和の方より其字取こすまじき事、指合等十一

韻を用ひらるべし。

第十八 詞の病 十九 同字病 廿 乱思病

第廿一 風二傍 廿二 片題 廿三 首尾

第廿四 返哥 廿五 懐紙の次第

右八ヶ條書記すに不及。竹園抄能く御覽可有候。

是一大事の家の事なるを、何者開板せし事、返々

おしき儀也。然れ共、さほどに心を付て見る人なし。

此抄の通、誹諧、連哥に思案ありて用ひ可給なり。

主人無是非、息一人、他一、二人此方へ届々、可被免外三、

愚私云、祝言の發句、脇、第三、證據の親句。

嘉辰令月歛無極 万歳千秋樂未央

此詞つゞき歛^{ヨロコ}極^{キハマ}、是も連聲^{イキシチニヒミ}。右、上の

句は發句、二ノ句、脇トス。發句、沓の一字を脇句、冠と五

音連聲ひゞきに^カて、必々可然。右の詩、上の句の

なしはむ也。万歳のまん^{マミ}メモの五音なり。

「56ウ

長生殿裏春秋富 不老門前日月遲

此上の句は、第三と用ひ、冠に五音も連聲もか、はりなし。

一句のうち、つゞき計也。殿裏春秋うち、しゆん^{チト}ハ

連聲^{イキシチ}。富不老、是フ也。フ、ノ同音也。是にて

よくしらせ給ふべし。此心を愚、當年、元日、三ツ物

に用ひ侍る。今日は入見參侍る。非自讚。古き文の詞

を取て引かへ、

心廣く帝都ゆたかな年始哉

良徳

嘉例めでたきたつ春の哥 藤谷次郎兵衛 貞成

曲を引琴に霞をうけ持て 藤谷嘉兵衛 貞利

右、発句は大学の詞故、五音も連聲もか、はらず。ゆたかなのなと、ねんしのね、五音ナニヌネノなり。哉のな

と、嘉例のか、めでたきのき、たつ春のた、かんがへ給ふべ

し。第三の曲を引のく、琴のこ、霞をのを、う

けのう、味へ御覧可有。かやうの儀いさ、かもらし

給ふべからず。以上。

「 57才

藍水之勝、待不以日。請全躰之而守約勤矣。謹止敬哉。子姑跋之。

上京 鶏冠井氏令徳在判

「 58ウ

此書者元祖貞徳^{ヨリ}貞室^ニ傳^フ貞室季吟^ニ傳^フ

季吟^{ヨリ}濃之貞静軒^ニ傳授^ス其子六々庵^{ヨリ}

愚受^レ之

寛保元辛酉歲

文月下浣

東文並記写之

「 後見返

夫桑士^⑤、誹諧者數百家、要莫士於英

長頭翁。全餘力之暇、彙集成一帙、自

珎藏家、深隱密篋也。今世、拳指之非

指、馬非馬。纔争我他、逼佗此、耆翁遂

蒐輯此道之奧儀、目曰、良藥。蓋欲使

其糟粕楂滓、消融混渚也。予雖寡陋、

自非角逮^⑥皓首^⑦笈曾有耳矣。一日

進曰、願許一卷為其守教也。以誓老

師^⑧、已孤聞勤苦、且自謂雖瞿鑠、顧

其桑榆^⑨、暮景道之湮没、弗秘。其秘遂

許可之。予受之、辱轉翻跳、喜甚不

少矣。今、吾子平生之久要銘心鏤

骨、衆角一麟、衆鳥一鴉。覃思研精

海山之低昂、風猶在下矣。而盟詞

及數條、予感其志而、不能擲揄顯

然容之。庶幾僭踰乎。然汝乃吞良

藥之妙味、癒誹諧之衆病。其青寒

「 58才

注

① 「衣」↓中「類」

② 中・函「類なる」による。

③ 「今句」↓中「人之句」

④ 「や、すむ」↓中・函「や霞む」

⑤ 「治るや」↓中「おさまれる」函「おさまる」

⑥ 「世間」↓中・函「契けん」

⑦ 「まめがなてかくす七歩の試筆かな」↓中「まめがなかくは七歩の試筆哉」函「りめがなくからは七歩の試筆かな」

⑧ 「あなゆかし(略)花盛」の句の後に他本では次の文言が入る。↓中

「いづれの花もめづる哥人の心なれともや妙椿の花さのみゆかしかるべき華とも見へすもし又／あなむさし鼠のふんの花の枝」函「何れの花も

めづる哥の心なれ共落椿の花さのみゆかしかるべき花共見へず若又／あ

なむさし鼠のふんの花の枝」

⑨ 「花の枝折」↓中「華枝折や」函「花枝おらじ」

⑩ 「月かへな」↓中「月なんか」函「月かな」(「雲やこけら風のしら

くる月鉤」^{かん}「毛吹草」卷第一・句体・射合)

⑪ 「詞」↓中・函「詞は」

- ⑫ 「か」↓中・函「の」
 ⑬ 中・函「持せ」による。
 ⑭ 「心持也」↓中・函「心持是也」
 ⑮ 「切る」↓中・函「切る、」
 ⑯ 「この」↓中・函「二の」
 ⑰ 「雲」↓中・函「松」
 ⑱ 「切る」↓中・函「切る、」
 ⑲ 「雪の雲」↓中・函「雪の雪」函「松の雪」
 ⑳ 「にや」↓中・函「ぞや」
 ㉑ 「ほ」↓中・函「も」
 ㉒ 「も」↓中「を」函「と」(「花はひも柳はかみを時つ風」『連歌秘袖抄』)
 ㉓ 「は何れ」↓中「良たて」函「はたて」
 ㉔ 「侍し」↓中・函「侍る」
 ㉕ 「切字」↓中・函「字切」
 ㉖ 「比よりと」↓中・函「比より」
 ㉗ 「上」↓中「ゆへ」
 ㉘ 「宿」↓中「花」
 ㉙ 「此いふばかりにやといへるに」↓中「此いふ計といふ元日に」
 ㉚ なし↓中「同じ上句にても元日の句立秋の句一日に限るなり」
 ㉛ 「なへ」↓中「つね」
 ㉜ 「は得せぬ」↓中「ゑぬ」
 ㉝ 「花と」↓中「花も」
 ㉞ 「中品の」↓中「中品の句」
 ㉟ 「聞之難き」↓中「一句きこへがたき」
 ㊱ 「畫」↓中「書」
 ㊲ 「不然。季」↓中「不可然」
 ㊳ 「十二句目」↓中「十三句目」
 ㊴ 「雑の花」↓中「雑の花、他の季の花春する也」
 ㊵ 「いはるまじ」↓中・函「いはれまじ」
 ㊶ 「字」↓函「字すわるなり」
 ㊷ 「初一」↓中・函「初り」

- ④③ 「五月は」↓中・函「五月雨は」(「五月雨は嶺の松かぜ谷ノ水」『長短抄』)
 ④④ 「やと疑ひ」↓中・函「下にてやと疑」
 ④⑤ 「月」↓中・函「色」
 ④⑥ 「にて」↓中・函「こそ」
 ④⑦ 「月」↓中・函「色」
 ④⑧ 「かと」↓中「こそ」
 ④⑨ 「説奏」↓中・函「節族」
 ⑤⑦ 「五文字」↓中・函「七文字」
 ⑤⑧ 「き、」↓「~~た~~」
 ⑤⑨ 「志那弥三郎範重」以降、「良徳筆執す」まで、『玉海集追加』跋文にほ
 ぼ同文あり。
 ⑤⑩ 「閑」を見せ消ちにし、「閑」は朱書。
 ⑤⑪ 「畫出」を見せ消ちにし、「書出」は朱書。
 ⑤⑫ 「捨玉」↓中・函「捨玉」
 ⑤⑬ 「遠近草」↓中・函「遠近集」
 ⑤⑭ 「まかせて」↓中・函「まがへて」(「世に知らぬ心地こそすれ有明の
 月のゆくへを空にまがへて」『源氏物語』花宴)
 ⑤⑮ 「事を」↓中・函「事よ」(「かねてよりおもひしことぞふししほのこ
 るばかりなるなげきせんとは」『千載和歌集』卷第十三・恋歌三・七九九・
 待賢門院加賀)
 ⑤⑯ 「キセン」から「ヌグナリ」まで中・函では平仮名表記。
 ⑥① 「相傳一大事秘」以降、42丁ウの一行目まで広本『天水抄』中「相傳一
 大事秘」にほぼ一致。
 ⑥② 「をもて色々エミ」↓中「をもくく色ニよみ」函「をもつて色によみ」
 天「を以色々に見ぬ」
 ⑥③ 「いかに、いつ」↓中・函・天「いつ、いかに」
 ⑥④ 「ふ事」↓中・函・天「ふ義」
 ⑥⑤ 「をば」↓中・函・天「せず」
 ⑥⑥ 「夕日」↓中・函・天「入野」(「道とほみいる野の原のつぼすみれ春
 のかたみにつみてかへらん」『千載和歌集』卷第二・春歌下・一一〇・源

顯国

- 66 「を、は」↓中・函・天「をば」
- 67 「日野」↓天「の野」
- 68 「千千代」↓中「千^{本ノマ、}八千代^{代カ(朱)}」函「千代八千代」天「千代や千代」(「春日野におふる子の日の松はみな千代をそへつつ神ぞ引くらん」『夫木和歌抄』卷第一・春一・一三七・皇太后宮大夫俊成卿)
- 69 「にかき」↓中・函「にかぎらず」天「ふかき」
- 70 「とめ候故」↓中「とめ候事」函「留る故」天「とめるゆへ」
- 71 「秋風のふく也」↓中・函「秋風のふく也」天「秋風のふく也のはそ也」
- 72 「高」↓中「寺」函「守」
- 73 「ぞ」↓中・函「や」
- 74 「む」↓中・函「ふ」
- 75 「き」↓中「さ」
- 76 「も」↓中「ぞ」
- 77 「つ、め、に」↓中「へ、め、ゑ」
- 78 「花をこそなは」↓天「正をこそなせ」
- 79 「ぬ」↓中「ね」
- 80 「可聞」↓中「き、づき也」
- 81 「てには」↓中「てにをは」
- 82 「耳」↓天「車」函「天」事「返」↓中・函「色」
- 83 「のぞ」↓中「のぞの」函「その」
- 84 「しる」↓中・函「しらる」
- 85 「せ」↓中・函「れ」
- 86 「なるらん」↓中「ならん」函「なり」
- 87 「く」↓中・函「た」
- 88 「の」↓中・函「したる」
- 89 「通ふ」↓中・函「まよふ」
- 90 「を」↓中・函「の」
- 91 「月」↓中・函「月などに」
- 92 「月に今に」↓中・函「月などに」

93 「是はねるや也」↓中・函「我なれや」の後に入り、「恋渡るらん」の
後には「省や」とある。

94 「をしはる、や」↓函「同はる、や」天「おしはかるや」

95 「む」↓中「に」函「こ」

96 「る」↓中・函「るる」

97 「て」↓中・函「も」

98 「え」↓中・函「行」

99 「と計云へるも有。はの字」↓中・函「とありての字」

100 「んとや」↓中・函「れとは」

101 「と」↓中・函「を」

102 「わかぬ」↓中・函・天「いわぬ」(「おもふどち春の山辺にうちむれ
てそこともいはぬたびねしてしか」『古今和歌集』・卷第二・春歌下・

一二六・素性)

103 「いへ事も」↓中・函・天「いへるもあり」

104 「きふ」↓中・函「けふ」天「けさ」(「けふのみと春をおもはぬ時だ
にも立つことやすき花のかけかは」『古今和歌集』卷第二・春歌下・

一三四・躬恒)

105 「き」↓中・函・天「し」

106 「をきそ」↓中・函「をきて」天「凡」

107 「いひのこす事あるなり」は中・函・天で「第十五」の下に割書され
る項目題のうちに入る。

108 「は」↓天「右」

109 「の」↓中・天「か」(「白玉かなにぞと人の問ひし時露と答へて消え
なましものを」『伊勢物語』第六段)

110 「やど」↓天「おと」(「ちると見てあるべきものを梅花うたてにほひの
そでにとまれる」『古今和歌集』卷第一・春歌上・四七・素性法師)

111 「共」↓天「ば」

112 「春」↓中・函・天「姿」(「雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみ
ぢぬ松も見えけれ」『古今和歌集』卷第六・冬歌・三四〇・よみ人しらず)

113 「足」↓中・函・天「定」

114 「り」↓中・函・天「れ」(「月見ればちちに物こそかなしけれわが身

ひとつの秋にはあらねど』『古今和歌集』卷第四・秋歌上・一九三・大江千里

①15 「き」↓中・函・天「し」

①16 「べ」↓中・函・天「く」

①17 「く」↓中・函・天「く」(「しほといへばなくてもからき世中にいか

であへたるただみなるらん』『後撰和歌集』卷第十五・雑・^{〇九五}忠岑)

①18 「に」↓中・函「を」天「の」(「難波人あし火たくやにやどかりてす

ずるに袖のしほたるかな』『新古今和歌集』卷第十・羈旅歌・九七三・

皇太后宮大夫俊成)

①19 「ぬ」↓中「ぬき」天「べき」

①20 「砂」↓中・函・天「妙」(「たごのうらにうち出でてみれば白妙の富士

のたかねに雪はふりつつ』『新古今和歌集』卷第六・冬歌・六七五・赤人

①21 「も」↓中・函・天「み」

①22 「しも」↓天「此類也」

①23 「き」↓中・函・天「し」

①24 「き」↓中・函「し」

①25 「也」↓中・函・天「之」

①26 「又」↓天「又」

①27 「五月まつ花たちばなの香をかげばむかしの人の袖の香ぞする」(『伊勢

物語』第六十段・一〇九)

①28 「一首」↓天「二句」

①29 「くるしきものは」↓中・函「くるしきものぞ」

①30 「心がへする物にもがた恋はくるしき物と人にしらせむ」(読人不知

『歌林良材』卷上・四四七)

①31 「八文字」↓中・函「物の字」

①32 「かしがまし」↓中・函「かしまし」

①33 「詮の八もじ」↓中・函「詮のもじ」

①34 「ものおもふ袖より露やならひけむ秋風吹けばたへぬ物とは」(『新古今

和歌集』卷第五・秋歌下・四六九・寂蓮法師)

①35 「かうやう」↓中・函「かやう」

①36 「つくしがたし」↓天「つくしがたかるべし」

①37 「にて之事」↓中・函・天「にて之事 附假名か、へ」

①38 「てには」↓中・函・天「てにをは」

①39 「忘れてはうちなげかるる夕かな我のみしりてすぐる月日を」(『定家八

代抄』卷第十一・恋歌一・八六六・式子内親王)

①40 「思ひあやまる事ゆへ、結句是を能心得よとの」↓天「の様に人のもて

あつかふ詞也。心やすくおもひよと」

①41 「ちはやぶる神代もきかず竜田河からくれなゐに水くくるとは」(『伊勢

物語』第六六段・一八二)

①42 「みかの原わきてながるるいづみ川いつみきとてか恋しかるらん」(『定

家八代抄』卷第十一・恋歌一・九二二・中納言兼輔)

①43 「君によりわが身ぞつらき玉だれの見ずは恋しとおもはましやは」(『後

撰和歌集』卷第九・恋一・五六六)

①44 「を」↓中「は」函「を」(「かくとだにえやはいぶきのさしもぐささ

しもしらしなもゆるおもひを』『後拾遺集』卷第十一・恋一・六一二・藤原

実方朝臣)

①45 「いつか」↓函「いつしか」天「いつちか」

①46 「五月」↓函・天「五月雨」

①47 「抜」↓中・函・天「抛」(「琴詩酒伴皆抛」皆』『白氏文集』・「寄」殷協

律^{多教江}・白居易)

①48 「波は」↓中「浪の」函「波の」

①49 「に」↓函・天「す」

①50 「か、へ」↓中・函「加へ」天「加へて」

①51 「にがし共」↓中・函「にしも」

①52 「をりつらん」↓中・函「をりぬらん」(「名そ高き月やかつらをおり

つらん』『発句帳』秋・月・十四日・宗祇)

①53 「此丸の所子細有」↓天「春日のみかく玉つしま」

①54 「軍場^{上同}」↓中・函「發句 脇 第三」天「軍陣 發句 脇 第三

哥 連誹

①55 「塙」↓「傍」中「傍」函「傍」

①56 「懷」↓「依」

①57 「蓮」↓中・函・天「連」

- ⑮ 「十ヲか」↓中「なをもつて」函「猶以」天「十か」
 ⑯ 「啼来たり」↓中・函「来鳴たり」天「来なくなり」
 ⑰ 「猶、たりのり」↓天「啼なりのり」
 ⑱ 「ながら」↓中「く」函「却て」
 ⑲ 「かはりめ是なり」↓中「替り如此也」
 ⑳ 注⑮参照。
 ㉑ 「十ヲ」↓函「十ヲ」天「おひて十」
 ㉒ 「桜花」↓中・函・天「梅の花」(「梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれば」『古今和歌集』卷六・冬歌・三三四・よみ人しらず)
 ㉓ 「桜花」↓中・函・天「梅の花」
 ㉔ 「もつてなり」↓中「呼なり」函「呼也」
 ㉕ 「此鹿ぞ啼に」↓中・函「此鹿啼の脇に」天「此鹿ぞ啼の脇に」
 ㉖ 「如詩韻」↓中「脇句は詩の韻のごとし」函「わき句とて詩の歌のごとし」
 ㉗ 「宗磧」↓中・天「是は宗磧の句也。脇句を宗長」函「是は宗磧の句也。此脇に宗長」
 ㉘ 「入冷し」↓天「にしむ。すずし。」
 ㉙ 「むやくは、たゞにし」↓中「むやくなりは、たゞにし」函「無用也」
 ㉚ 「無益也は、ただにふし」
 ㉛ 「ぞ」↓中・函「と」
 ㉜ 「先」↓中・函・天「先句」
 ㉝ 「後」↓中・函なし。中・函では第十一と第十の順番が西園寺本と逆。『広本天水抄』も同じ。
 ㉞ 「あゆみ」↓中・函「寿」
 ㉟ 「前」↓中・函なし。中・函では第十一と第十の順番が西園寺本と逆。『広本天水抄』も同じ。
 ㊱ 「ハマヤラワ」↓中「ハマヤラワ也」函「ハマヤラロウ也」天「ハマヤラ也」
 ㊲ 正しくは「陣」。他本も「陣」とする。
 ㊳ 「脇」↓中・函「脇句」天「脇句に」
 ㊴ 「直したる句」↓中・函・天「直したる句、如斯」

- ⑱ 「山ざくら」↓中・函「山ざくら。又、脇句」
 ⑲ 「両句直し、工藤が藤の字に」↓中「両句直工藤が藤に」函「前句直に藤が藤に」天「如此両句直シ工藤の字に」
 ⑳ 「水」↓中・函・天「の」
 ㉑ 「コ」↓中・函なし天「也」
 ㉒ 「軍に名」↓中・函・天「軍に名とり川の名」
 ㉓ 「ノ」↓中・函・天「也」
 ㉔ 「にて」↓中「と」
 ㉕ 「玄旨法印」↓天「又、玄旨法師」
 ㉖ 「きこく」↓中・函「きこく哉」
 ㉗ 「所の祝の作意」↓中「所の祝の作意也」函「所の作意也」天「所の祝の御作意」
 ㉘ 「き」↓中・函「し」
 ㉙ 「に」↓中・函・天「へ」
 ㉚ 正しくは「陣」。㉙参照。
 ㉛ 「中・函・天」を「を」による。
 ㉜ 「差」↓「差」中「羨」函「羨」天「羨」
 ㉝ 「しくも」↓中「しへも」函「子へも」天「友家へも」
 ㉞ 「中・函・天」紙に繪を好」による。
 ㉟ 「後」↓中・函なし。中・函では第十七と第十八の順番が西園寺本と逆。『広本天水抄』も同じ。
 ㊱ 「前」↓中・函なし。
 ㊲ 「塙」↓「塙」
 ㊳ 「無」↓「毛」
 ㊴ 「ひゞきにて」↓中「ひゞき通ひ」函「響通」天「響にて」
 ㊵ 「今日は入見参侍る」↓中「ゆへ書付令人見参」函「ゆへ書付令人見参侍る」天「故書付令人見侍る」
 ㊶ 跋文部分は「俳諧天水抄」の跋文に類似。
 ㊷ 「速」↓中「建」
 ㊸ 「憑」↓「憑」
 ㊹ 「掄」↓中「掄」

〔付記〕

本稿は、平成二十四年度立命館大学大学院文学研究科開講の「近世文学特殊問題」(通年)の演習で提出された発表原稿の一部を取りまとめたものである。

小林 孔 (大阪城南女子短期大学教授)
 武田 悠希 (本学大学院博士後期課程)
 高井 悠子 (舞鶴工業高等学校非常勤講師)
 大坪 舞 (本学大学院博士後期課程)
 二俣 希 (本学大学院博士後期課程)
 岡橋 英子 (本学大学院博士前期修了生)
 中川 佳保 (本学大学院博士前期課程)
 福田 宏美 (本学大学院博士前期課程)